

やま だ さい きち

山田才吉

名古屋財界の鬼才とうたわれた不屈の男

— 県内初の缶詰工場をつくる —



山田才吉 (1852 ~ 1937)
写真：『名古屋再発見』

山田才吉は(1852-1937)は、美濃国厚見郡富茂登村(現:岐阜市大仏町)で、料理屋山田辰二郎の長男として生まれた。

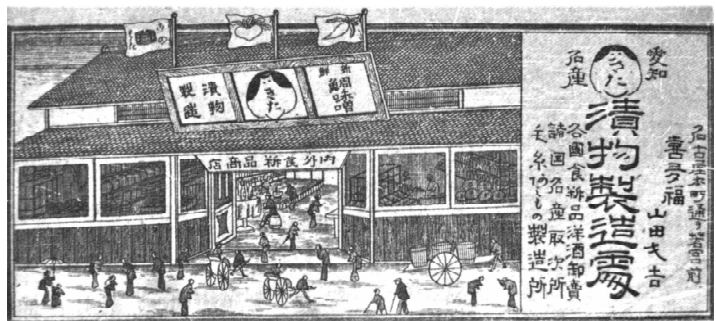
1886(慶応2)年、山田は江戸に出て板前として修業、10年間、浅草界隈で腕を磨き、いっばしの料理人となった。暇さえあれば保存食、香の物の改良・工夫をし、ナスやウリを味醂粕に漬け込む新案の香の物を造った。

■味醂粕漬の守口大根を基に缶詰製造に挑戦

24歳になった才吉は、故郷に帰って自前の店を持つことにし、1878(明治11)年、才吉は大須門前町に「山才屋」を開店した。

1881年、新しく「喜多福」を末広町3丁目に開店、守口大根味醂粕漬を「守口漬」で売り出した。売り込みと品質改良に努め、名古屋土産として好評で、「名古屋名物・守口漬」の名は全国に知れ渡っていった。

この頃、保存食を考えていた才吉はにヨーロッパの缶詰を目にし、北海道の開拓史石狩缶詰所に人を行かせ、米国製の機械や操作技術を精力的に勉強させた。県も缶詰製造を新しい産業に育てたい思惑があり、才吉は缶詰工場として新開地5万坪(現・東築地五号地の一部)を格安で払い下げてもらった。1887年、海藻・魚介類の缶詰製造販売を県下で初めて開始した。当時の缶詰は超高級食品で、缶詰6個の値段で米が3俵買えた時代であった。1891年の濃尾大地震で救援食品に缶詰と守口漬を寄進し、名を上げた。缶詰は日清・日露戦争で軍部から大量の発注を受けて爆発的な人気となり、才吉に巨額な富をもたらした。



明治20年頃の喜多福の銅版画 出典：『名古屋再発見』

■東洋一と言われる娯楽施設や大仏の建造

山田才吉は、名古屋に政党活動ができる大集会場がないため巨大な建物の建設を計画、1897(明治30)年、東洋一を誇る娯楽施設、東陽館を建設した。本館は御殿風檜皮葺の二階建て、一階は小部屋20室があり、二階は396畳の大広間であった。庭園には築山、池、料理店、遊技場などがあつた。家族連れで1日中楽しむことができる、と連日満員の盛況となった。名古屋財界人も唖然とさせたが、6年後にあえなく焼失した。才吉はめげずに焼け跡で再建を決意した。

名古屋教育水族館建設のため「水族館の視察団」を結成、視察と研究を重ねた。コンクリート職人後藤鉄五郎も加わった。水族館までの交通の便を考え熱田電気軌道会社を創立し、熱田神戸～東築地間を1910年開通させた。水族館は1910年4月10日に開館し、1年目で45万人の入場者が押し寄せた。ところが再建の南陽館は九分どおり完成したが、暴風で倒壊し、水族館も破壊された。

才吉は自慢した建物を火事や台風で無くし、「名古屋のために何か大きな記念物を」遺したいと考え、聚楽園に災害にもびくともしない大仏を人造石で造ることにした。大仏の開眼式が1927年5月21日に行われた。奈良の大仏より大きい日本一の大仏であった。

聚楽園の大仏は思いついたらすぐ実行、苦境を乗り越える不屈な男の最後の作品であった。



聚楽園大仏

写真：筆者撮影

(大橋公雄)